
ユネ

冷泉晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユネ

【コード】

N0196W

【作者名】

冷泉晃

【あらすじ】

少女と共に山を登った。僕のお気に入りの場所に連れていくために。そして

時が忘れさせてくれると。

全ては時が消し去ってくれと。

そう考えるようにしている。

心の中にねちねちと癒着する思い出たちを無理やりには引きはがすこともできず。

かといって大切に愛で続ける訳にもいかず。

そうして僕は、全て時が運び去ってゆくのをただひたすら待った。

僕の後ろから真っ白い少女がちょこちょこついてくる。山道は険しいから無理をするなど言ったのに。息を切らして顔を真っ赤にしながら、それでも僕のあとをついてくる。

「休憩しようか、ユネ」

「ううん、平気」

にこっと笑ってユネは答えた。でもまたすぐに下を向き息を切らす。

「ワンピースなんて着てくるから」

真っ白なその服がもう既に汚れてしまっている。膨大な汗で若干透けてもいた。

「大好きなんだよこの、服、はあ……」

「やっぱり休憩しよう」

近くに座れそうな切り株 - 確かそんなようなものだった気がするが、よく覚えていない - - があつたので、ユネをそこへ導いて座らせた。

「ありがと、オーキ」

相変わらずユネは僕の名前を覚えてくれない。

「僕はコウキだって、何回言ったら覚えてくれるんだよ、ユネ」
えへへ、なんて言って笑ってる。

そう言うユネも、変わった名前をしている。僕も最初は読めなかった。ユネと出会ったのはいつの頃だろうか。近所で野球をする友達を遠くから眺めていた - 確か足を怪我していたのだと思う - - 時に、自分よりちょっと背の低い女の子が話しかけてきた。はつきり言って記憶が曖昧なので、それ以前にも会っていたかもしれないし、それ以前はただ彼女を見かけていただけで喋ったのはその時が初めてなのかもしれない。それにその少女がはつきりとユネだったかも定かではない。ただ、カキインとボールが遠くまで飛んでいく音と風景と共に、僕の心臓が高鳴っていたのは事実だ。

いつの間だろう、僕はユネとふたりつきりで遊ぶことが多くなった。空き地や裏山でお花摘みをしたり - 男なので少し恥ずかしかったのだが - よくわからない歌を歌ったりした。家にも来た。大してつまらないものばかり置いてあつたろうに、それでもなぜか楽しかったようだ。ユネはいつも笑ってたから。ユネの笑顔以外の顔をほとんど見たことはない。

「さあ行こう、オーキ」

立ち上がり手に拳を作つてやる気を見せるユネ。

「もうちょっと休んだら？」

まだユネの顔がうつすら赤いのが気になつて僕はそう声をかけた。
「ダイジョーブ。早くオーキの宝物見たい」

やはり、ユネは常に笑顔である。どうしてそんなに笑顔でいられ

るのか、今になっては怖いぐらいの疑問である。だがその時は、笑顔なのは良いことだ、と超がつくほど短絡な考えだった。ユネといるととても楽しかった。

「宝物、つてかただのキラキラの石だぞ」

数日前に山で見つけた、キラキラ光る赤い石。僕はそれを、山の中にあるお気に入り洞の洞穴 - 人が二、三人入れるだけの、奥行もない小さな洞穴だが - に隠しておいた。今日はそれをユネに見せるのだ。そのためだけに僕とユネは小さな体で険しい山道を登ってきたのだ。僕ひとりならまだしも、ユネもとなるとかなり気を使った。途中何度も、やめようか？ と尋ねたが、彼女は宝石のような笑顔をたたえながら、ううん、平気、と何度も繰り返すのだ。僕は胸が熱くなるのを、確かに感じていた。

するとユネは突然こう告げた。

「ねえオーキ、チューしようよ」

「えー！」

あまりにもいきなりである。僕は心底焦った。

「ユネ、どうして？ そんないきなり」

「ダメ？」

ダメなはずがない。あとで考えるとすぐその答えにたどり着くのだが、森の中という特異な空間だからであろうか、僕はそのとき一瞬、ダメなんだろうか、と思ったりした。でも、

！？

いつの間にかユネが背伸びをして口を突き出している。もっと上品にしてくれないものかと頭の片隅で思いつつも、あまりの焦燥感に心の整理がついていない状況であった。

そこには、ユネのやわそうな唇がある。僕は、ごくりとのを鳴らした。今考えるとかなりはしたない。それでもその時の自分にはそんな制御をかけることは不可能であった。

ユネのおかしな行動は、これに始まることではなかった。僕がユ

ネをおいて他の友達と遊びに行こうとすると、どうやって察知したのか必ず付いてきた。僕はなぜかユネと友達とが一緒になるのが嫌だったので、渋々友達との遊びを断念した。友よりユネを優先したのだ。

他にも、ユネがこんなことを言った時もある。

「オーキ将来は結婚するの？」

「えっと、うん」

その時もなんだかいきなりで、焦っていたはずだ。

「誰と？」

「え、お、お母さん」

何だかそう答えるのが自分の中で決まりのようになっていた。その時も遠慮なくそう答えてしまったのだ。女の子の目の前でもそんなことを言える図太い神経が僕にはあつたらしい。

するとユネは顔色を変えた。この時初めてユネは笑顔以外の顔になった。それは決して悲しい顔ではなかった。なんだか無表情というか、お面の顔というか、憑き物が落ちた瞬間というか、ユネという機械が動作を休止した、そんな感じだった。それでも僕は彼女を傷つけてしまったのではと心配になって。

「えっと、ごめん」

と謝った。でも当時の僕は、どうして謝っているのか分からなかっただろう。今なら痛いほど分かるというのに。ユネはその後すぐに、何事もなかったかのようにまた笑顔になった。子供ながらに若干恐怖を覚えたのは確かだ。

鳥が遠くで鳴いているのが聞こえた。

もうすぐだ。あの浅い川を渡ったら、岩場に例の洞穴がある。その先は高い崖になっていてそれ以上は進めない。ユネは足取りは重いもののしつかりとついてきていた。僕は何度か振り返って彼女を待つ。彼女はゆっくりと近づいてくる。

「あの川の向こう」

僕が川の方を指さしてやると、ユネはしんどそうに顔を上げ、より一層につこりとしてから顔を見た。もう声を出すのすら厳しいらしい。僕はさらに心配になって、川で水を飲ませてやろうと思った。

彼女のチューは、思っていた以上にあっさりだった。恋人とするもの、というよりは、好きなものを自分のものとして所有してしまいたいというような、そういう感じ。うまく説明できない。ふつくらとした唇が自分のそれに触れたと思ったら、急にものすごい吸引力で吸ってきたのだ。僕は呆気にとられ、その呆気が消え去らぬうちにユネはぱつと口を離れた。あれ、チューってこんな感じなのか？ 今までそんな経験などないのだから分かるはずもない。これが正解なのかもしれない。世間の人々がする接吻というものは、全てこんな感じなのかもしれない。

「オーキ、大好き」

億面もなく満面の笑みで言う彼女を見ると、やはりそうではない気がしてくる。

その時の僕も何となく分かっていた。

おかしな女の子、ユネ。それでもほうっておけない少女、ユネ。

不思議な魅力に包まれた少女　ユネ。

川で水を一口飲むと、ユネは生き返るように、ぷはあと声をあげた。素直にかわいい、と思った。そう思っただけで恥ずかしくなった。かく言う自分も全く同じ反応で水分補給をしていた。去勢を張っていたが自分もだいたい疲れていたようである。

ユネは大分疲れたようで、足が痛いと言い出した。僕は彼女を抱え　羽毛のように軽かった　その川を渡った。その時になって気づいたが、川にはやや深いところがある。それでも膝の上くらいだから自分は大丈夫だったが、

ユネは。

帰りは気をつけようと、腕の中で眠る彼女を見つめながらそう思った。

洞穴に入ると、周りの音がすつと遮断される。この瞬間が結構好きだ。異世界への入口のような気がして。僕は近くにユネを寝かせると、奥の方から件の赤い石を持ってきた。石場という寝心地の悪さから、ユネはすぐに目を覚ました。

「おおようー」

両目をこすり朝の挨拶をするユネ。今はもう昼下がりと呼ぶべき時間である。

「さつき寝始めたばかりだよ」

「ここは？」

くるくると辺りを見回す。その所作も幼くて、愛らしい。

「着いたよ。秘密の場所」

「おおー」

妙に低めの声でユネは感心の声をあげた。僕はちよつと照れた。

ユネは、僕がこの場所に連れてきたお客さん第1号である。

「はい、ユネ。これがキラキラの石」

それは、今でも何かの宝石 - ルビーかもしれない - と思えるような、実に綺麗でキラキラした石だった。ユネは目を輝かせ、じつとそれを見つめていた。

「あつちの山のあのおつきい川沿いで見つけたんだ」

「すごい。こんな石、ほんとにあるんだ」

ふたりでひとつの石に見入っていた。そんな情景も、僕の胸の中に残る”懐かしき”記憶のひとつである。

その石について、ふたりであだこつだと語り合った。これは火星の石なんだとか、どこかの国の王様が落としていったんだとか、森の妖精たちが大事にしていたんだとか。そんなふたりの楽しそうな声が洞穴の天井で響いて広がる。天井伝いにしづくがぼつり、ぼつりと落ちる。森の中の洞穴の中、そんな音だけが楽しげに響いているのに、誰もそれに気づかないのだ。世界の中で、自分たちがいる空間だけが、特別なもののように感じた。

それから後はあまり覚えていないし、つぶさに話したくはない。僕は早くこの思い出とおさらばしたいのだから。

帰りになって、僕たちはふたりであるの川を歩いて越えた。そしてしばらく歩き、川の辺りが遠くに見えなくなった頃。

「オーキ、やっぱりあの石ほしい！」

ユネがそう言い出した。多分さつきからずっと欲しかったんだろう。はやく言ってくれればいいのに。はっきり言って僕はユネにある石をあげるつもりだったが、何故だか言い出せなかった。なので僕は迷わずに承諾する。するとユネはやったあと叫んで、一目散に元来た道を駆けていった。

「ユネ、僕も行くよ！」

そう叫ぶとユネは、

「ダイジョーブ！ すぐに取ってくるから」

なんて言って、また走り出した。水を飲んで洞穴で休憩したからって、あんなに走れる体力はどこから来るのだろう。そう思いながら、僕は五分ほど待った。

すぐに、嫌な予感がした。

あの、深み。

ユネ！

僕は思い切り駆け出した。川のところまで来た。

何かが浮いている。

すぐに近寄ってそれを抱き上げる。

羽毛は水を吸って重くなっていた。

そうして、冷たかった。

有り得ないくらいの恐怖と焦燥と悲哀と絶望と、
いろんなものが胸に溢れ出し、喉元から締め付ける。

そうだ、五分じゃなかったんだ。

僕が体感したのが五分なだけで、本当は五分じゃなかったんだ。

そう考えないと。

たった五分でこんなことが起こるはずがない。

僕は胸を焼くその感情の集合に突き動かされて、

必死に走った。

とにかく走った。

早く！ 急げ！ もっと早く！

それ以外は何も考えられなかった。

僕は無我夢中で走り続けた。

蝉の鳴く声がジイインと過ぎ去っていった。

そんな、僕の夏だった。

僕と彼女の夏だった

時が忘れさせてくれると。

全ては時が消し去ってくれと。

そう考えるようにしている。

そう考えないと、僕はもう押しつぶされそうなんだ。

あの日以来ずっと絶えることなく流れ続ける感情の潮流が、

いつ氾濫を起こして溢れ出すか分からないから。

だから。

だから僕は、そう考えるようにしている。

(後書き)

三作目。思いつきで一日で書き、推敲とかも全然していません。誤字脱字だらけだと思いますが、ご容赦ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0196w/>

ユネ

2011年10月9日06時40分発行